

# スポーツ

## 頑張った女子水泳

## 不甲斐ない貴乃浪

## そして長野五輪

盛田 常夫

横綱になれない貴乃浪

団塊世代の小学生時代は栃若全盛期。その前は吉葉山、鏡里、千代の山、朝潮の時代で、栃若の後は大鵬、柏戸と続く。この頃、鶴ヶ峰という小兵力士がいた。寺尾3兄弟の親父さん。もろ差しになるとめつぼう強い力を発揮するので、横綱・大関相手にもろに入ると場内もテレビの前も沸いたものだ。

ふつう二本差した方が有利で、差された方が不利になる。ところが、最近

は力士の体が大きくなって、逆に相手を抱え込んで身動き取れなくなる取り口が出てきた。長身の力士にはこれができる。相撲用語で「懐が深い」という。貴乃浪と久島海がその典型である。

残念ながら、高校横綱、大学横綱を総なめにした久島海は逆にその脇の甘さを突かれて、十両と幕内を往復する並の力士になってしまったが、体のバランスが良く、運動神経が良い貴乃浪は脇の甘さを餌に、相手を抱え込んでから決めてしまう型を造ってしまった。脇の甘さを指摘する親方衆も、あまりの腕力（かいなじから）に脱帽し、こういう型もあり得るのかと納得し始めたところだった。

しかし、綱のかかった初場所4日目の相撲を見て、やつぱり駄目だと思つた。引つ張り込んだ相手が、自分と同じ体格の琴の若である。自分より小さい力士には有効でも、同じ体格の力士に抱え込みはない。これでは最初からハンディを背負つて戦うようなもの。

前の九州場所でも同じ抱え込みから、土俵際で辛うじて「かわずがけ」で勝っている相手である。まったく同じパターンで行っているのだから、頭の構造を疑う。

差して相撲を取れるようにならない限り、いくら腕力が強くても、抱え込み相撲だけで綱を張れないことは明らかだ。余程の精進がないと、貴乃浪が綱を張ることはないだろう。

## 水泳世界選手権

1月の豪州パースで開催された選手権。日本女子が気を吐き、銀4個、銅4個を勝ち取った。うち銀2個と銅1個はシンクロナイズド・スイミング。ちなみち、ハンガリーは競泳で金銅がそれぞれ1個ずつ、水球が銀の合計3個。

アトランタでは史上最強軍団といわれながら、メダルが一つも取れなかった女子競泳。引退した千葉すずを除き、ほぼ同じメンバー。なかでも背泳ぎの

中村真衣が頑張った。百米の銀、二百米の銅は賞賛に値する。四百メドレーでは第一泳者として、1位でバトンタッチしている。二百背泳ぎでも残り二五メートルまでトップを保っていたから、今後に期待できる。

念願を果たした十五歳の青山綾里。彼女は百のスペシャリスト。飛び込んでから三十五メートル付近まで、ドルフィンキックの潜水泳法で水中を泳ぐ。決勝では同じ泳法をとるアメリカのミステイ・ハイマンとコースが隣り合わせ。ハイマンが先に水中から出てトップと思いきや、続いて青山が水面上がってほぼ1身長リードのトップ。最後はジェニー・トンブソンの追い上げに合い、ゴール前で交わされたが、青山の会心のレースだった。

この潜水泳法が3月から十五メートルまでに制限された。無呼吸運動が健康を損なうというのが表向きの理由。無呼吸運動は水泳でも陸上でも短距離に特徴的なもの。五十米自由形なども

ほぼ無呼吸だから、バタフライだけ規制するのはおかしい。それにドルフィンキックこそ、もっとも良くイルカのように動きを模倣したものだから残念だ。

青山とトンブソンの体格は子供と大人ほど違う。腕力を使う部分では負けるが、水中では負けないところに、体格の差を埋める面白さがあつたはず。

### ハンガリーは中位の出来

常に水泳の金メダリストを輩出しているハンガリー。エゲルセギなき後のハンガリーを代表するのは、平泳ぎのコヴァチ・アーグネシュ。期待に応えて二百米で金メダル。ただ、エゲルセギのように、万能タイプではなく、他の種目もというわけにはいかないが今後は百にも期待がかかる。

男子の平泳ぎは伝統的に強いが、二百米の金を期待されたロージャは銅に終わった。二百個人メドレーのアトランタ金メダリストのツエネは病み上がりで、決勝に残れなかった。期待以上

だったのが、百米自由形の決勝に残ったズボール。ハンガリー選手で初めて五十秒を切る結果を出したが、8位に留まった。日本女子の百米自由形では源も決勝に残った。

四百米メドレーリレーはハンガリー男子が3位で予想外の出来。女子は5位（日本は男子が7位で、女子が3位）。ただし、男子の平泳ぎ泳者をめぐって、チームの2人のコーチは厳しい対立関係に。女子のキャプテンはキシユ・ラースローで、エゲルセギを育てたコーチ。キシユのグループには平泳ぎの百のスペシャリストのギユトラーがいる。男子のキャプテンはセーチ・タマーシュで、ロージャが属するチームのコーチ。

セーチはメドレーのメンバーに百で決勝に進んだギユトラーではなく、B決勝の十七位になったロージャをメンバーに選んだ。これで日頃から折り合いの悪い2人のコーチの関係がさらに悪くなった。

ハンガリー水泳界は大混乱

ハンガリーの水泳界はこのパース大会以後、混乱状態になった。大会の不振の責任を問う議論が噴出するなか、大会前にオーストラリアでおこなわれた男子合宿の費用の不正使用が発覚した。参加選手も満足な食事を与えられなかったと告白。現在、スポーツ省と検察が捜査中。

こうしたなか、ロージャはセーチ・コーチから離れることを表明したが、さらに水泳協会を直撃したのは有力スポンサーの降板。O.P.銀行と医薬品メーカーのファーマビットの2大スポンサーが相次いで撤退を表明し、現在、ハンガリーの水泳界は大混乱。

天晴れ清水、船木

スポーツ選手にとって、五輪は4年に一度の競技。特定の1日を競技生活の最高の条件のなかで迎えなければ頂点に立てないのだから、これは実力以上のものが要求される。

今シーズンの清水は結果を出せない

まま長野を迎えている。誰もがウォーザースプーンの勝利を予想するなか、清水は競技前、金メダルを獲得できる確率を8割以上と言いつついる。ようやくスラップを使いこなし、それがタイムに現れるようになったという自信だ。実際にやり遂げる力に脱帽するしかない。

昨シーズン絶好調だった堀井はスラップをこなせないまま五輪を迎えた。彼も日本人離れした精神力の持ち主だが、次の五輪での雪辱を期待したい。活躍が予想されたカナダ勢はまったく不振。経験不足だろう。しかし、オランダ・チームを見てみると、経験やスケートテクニクを超える技術開発で、時代の先端を行っている感が強い。中長距離の圧勝はオランダ全盛時代を告げている。

気が弱い木村

失望したのが、アルペン回転の木村。

ワールドカップの成績（五輪前まで回

転総合5位、3位は一度だけ）から見ても、上位3人に入るには、2本とも果敢に攻め切る以外に勝ち目は無い。新聞記事によると、朝からトーストにバターを塗る手がふるえていたというから、これはどうしようもない。

「コースアウトして記録が残らないより、五輪記録が残った方が良いから慎重になった」というのが木村の弁。これでは最初から勝負にならない。2回目にコースアウトしたトンバの方が勝負師だ。五輪では上位3人に入れなければ、何位になっても同じというのが、トンバの考え。メダルを狙える選手はその位の気力が無いと、取れる物も取れない。木村は勝負の前から負けていた。マイヤーを見習って欲しい。強気に攻めなければメダルは取れない。滑降ではスピードを緩めずに空中ターンに入って場外にすっ飛んだが、その強気は大回転、スパーGで怯むことがなかった。

ジャンプのノーマルヒルはベテラン

の伏兵ソイニネンにやられた。欧州ジャンプ週間の船木の史上初の全勝優勝を食い止め、続くフライング大会の第1戦でも船木の優勝を阻んだハナバルトがそのままの勢いで乗り込んでこれば手強いところだったが、意外や彼を含めたドイツ勢は五輪では絶不調。時差ボケがあつたのかもしれないが、まだまだ若いということだろう。昨シーズンのワールドカップ・チャンピオンのペテル力は調子が上がらないまま五輪へ。ジャンプは経験が物を言う。

サマージャンプから好調だつた原田がそのまま調子を維持して五輪を迎えた。団体の1本目の失敗は気象条件が主な原因。滑走コースに雪が貯まり、スピードが落ちれば距離は出ない。欧州ジャンプ週間の第4戦で船木が沈んだのも、気象条件の変化だつた。誰も成しえていない史上初の四連勝優勝はならなかつた。

原田は船木ほどに気が強くないか

ら、ボカが出やすいのだろうか。

昨年末から今年にかけて絶好調の船木が予想通りの活躍。秋元が怪我をして、選手生命を終えたフライング大会できつちり総合優勝して五輪に入った。日本は若手選手だけを送り込んだ大会。二百メートルを超える飛距離が出るジャンプ台だ。怪我をしなければ良いがと思つていたが、杞憂だつた。あの勝利で五輪は間違いないと思つた。

若いのに落ち着きがある。葛西のお株を奪つた誰も真似のできない飛型に彼の強気な性格が現れている。木村とは大違い。もつとも、木村のように他に競う仲間がいないアルペン競技と、スピードスケートやジャンプのようにチーム内に競う仲間がいて、二枚看板で勝負できる競技の違いはある。結局は層の厚さも選手の精神力を養うということだろう。

開会式は昼間の野外オペラ

閉会式は楽しかつたが、開会式は昼間に野外オペラを見ているような白けがあつた。日中に設定したのはアメリカのTV放映の都合だろうか。「蝶々夫人」のアリアに乗つて、鈴木博美がチャイナ服で聖火台へ駆け上がり、伊藤みどりもこれまた和服かチャイナ服か分からないような出で立ちで、学芸会の桃太郎のような台座からせり上がつてこれを受けたが、ヨーロッパのオペラで見る「チャイナ服の蝶々さん」を思い出した。

土俵入りも、国技館のスポットライトが当たっているから見栄えがするのであつて、昼間の広い競技場では単調な儀式でしかない。昼間の野外オペラは誰がやっても白けようが、もう少し考えようがあつたように思う。